【**組織的な若手研究者海外派遣事業の帰国報告書**】

200611663

劉彦伯

**実習先**

2011/4/27-5/20 Case Medical Center, Emergency Department, Ohio, US

2011/5/23-5/27　 Takeda Global Research and Development, Chicago, US

2011/5/30-6/10 Eastbourne District General Hospital, Department of Psychiatry, Eastbourne, UK

**実習内容**

Case Medical Centerでは、私は指導医であるTotten先生、もしくはレジデントについて行って、診察を見学させていただいた。簡単な身体診察は取らせていただいて、症例によってはその場で質問を受けたり、レクチャーしていただいた。レジデントが仕事中に「ちょうどこの疾患のプレゼンテーション資料がある」と言って、その場でパワーポイントを見せながらレクチャーを始めることもあった。

初めの2週間ほどは英語についていくのに必死で、とにかくわからないことを質問していたが、慣れてくると医学生やその他のコメディカルにもついていって、経験した症例のディスカッションをすることができた。

Totten先生もとても教育的で、質問するとよく答えてくださった。また、正直に「総合診療科、もしくは家庭医にも興味がある」と伝えると、その病院のFamily Medicineに一緒についてきてくださり、直接その科の先生に私の受け入れを頼んでくださった。その科の先生が偶然日本人で、快く引き受けてくださり、5日間ほどFamily Medicineでも実習することができた。やはり、何事も積極的に、貪欲に行くことが大事である。

左からMr. Bo, Dr. Totten, Sean

Takeda Global Research and Developmentではいくつかのミーティングに参加させていただいた。一番興味深かったのが、今回担当してくれた父の同僚、Leoのオランダでの医学教育の話である。オランダでは医学生が医者とほぼ同等のことをする。患者を受け持ち、病歴を聞いて身体診察をし、プランを立てて指導医にレクチャーをしてもらうという流れであった。手技の面でも、例えばlumber punctureも何度もやったとおっしゃっていた。救急科をローテートしたときは、オンコールの1st touchを医学生にまかせているそうである。

Eastbourne District General Hospitalでは私は1週目、2週目ともに、見学しているとき以外はひたすら入院患者の病歴をとっていた。精神科なのでコミュニケーションがとれるかどうか不安で仕方がなかったが、アメリカに劣らず多民族国家であるためか、何度も聞き返す私でも快く受け入れてくださった。

**考察**

1. 医療システムの違い

アメリカとイギリスでも違うが、特にアメリカでは業務が細かく細分化されていた。たとえば、他の科から他の科に患者を移すためのトランスポーター、ひたすら静脈採血をするだけのフレボトニストなど、日本では医者がやっている業務のみをする人たちがいた。このことで医者の負担が減り、治療に専念できる利点がある半面、医療費高騰の要因となっていると感じた。

1. 医学教育の違い

教育的な方が多かった。医者だけでなく、コメディカル（看護師、技師、薬剤師）に質問してもやさしく答えてくださった方が多かった。レジデントでも、「ちょうどこの疾患のパワーポイントがあるから見せるよ」と、その場でレクチャーをすることもあった。また、Case Medical Centerでは毎週木曜はレクチャーの日で、レジデントや他の病院から招待した先生による授業があった。「ここの研修医プログラムの中では、レジデントは週に5時間レクチャーを受けなくてはならない」と言われたとき、やはり教育に関しての意識は高いと感じた。

1. 文化の違い

日本では医者に限らず、夜遅くまで働くことが当然となっているが、欧米は17:00に帰宅することが通常であった。むしろ、夜遅くまで残っているとWorkaholicではないか、なぜ早く帰らないのかといわれるほどであるという。自分自身の時間を大切にするというのは、日本はもっと見習っていいと思う。

1. 英語

行く前は英語が通じるかどうか、コミュニケーションがちゃんととれるかどうか心配であったが、何とかなるものだと感じた。欧米は多民族国家である国が多く、英語が話せない外国人と出会うことは日常茶飯事であり、一生懸命伝えようとすれば、がんばって意味を汲み取ろうとしてくれる方が多かった。また、いろいろな発音の英語が飛び交っていたので、意味が通じれば発音はそこまで気にする必要性はないと感じた。

**感想**

アメリカ、イギリスと、日本と違う国の医療を見ることができてとても刺激になった。外から日本を見ることで、また違った視点で自国の医療を見つめることができ、ものごとを多角的に考えようとするきっかけをつかめた。もちろん、知識の面でも様々な気づきがあり、大変面白かった。この実習が将来の医師として仕事をするうえでプラスとなることは間違いない。関わってくださったみなさんにこの場を借りてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。